

子どもが主役のりり 学びを支援する大人の役割

子どものためのボランティア等の体験活動は、全国各地で企画・実施されています。しかし、実質的には大人が全て準備をして、子どもは一参加者としてプログラムにのぞむことが多くみられます。体験活動等における学びは当日だけではなく、企画から実施に至るプロセスの中で、さまざまな人・場所と接して試行錯誤しつつ具体化するところにあります。子どもが主役となれる学びの場を、大人がどのようにサポートしていくかを事例を通して考えます。



まちを再発見！ 「ひみつっこ探偵団・ちいき知りたい(隊)」がゆく

栗東市社会福祉協議会 栗東市ボランティア・市民活動センター 滋賀県
http://www.biwa.ne.jp/~ritto-vc/



子どもたちが自分のまちの「すごさ」を発見する

栗東市ボランティア・市民活動センターでは、地域での体験学習や野外遊びを通じて、子どもたちの成長を支援する『地域安心協働楽校』(以下「楽校」)を平成14年から始めた。核家族化が進み、外で遊んだり仲間と遊ぶ子どもの姿が見られない状況を何とかしなくてはと、人と地域のつながりを築き直すことをめざしている。

楽校の基本形は、取材形式で地域にあるものや達人などを探するというもの。キーワードの、主食の米を作る「田んぼ」、栗東の豊かな「自然」、人々の暮らす「まち」、個性あふれる「人」、地域に伝わる「芸術・文化」の5つを柱にして、子どもたちはカメラ、メモ帳、地図、バスの時刻表等をもって、まちの調査に出かける。

楽校の主目的は、子どもたちが自分たちのまちの「当たり前」の「すごさ」を知ってもらうことである。普通に生活している人や慣れたはずのまちに、自分がこれまで知らなかった新しい発見がある。多くの人と交わり、発見を重ねていくなかで、子どもたちの視野が広がり、社会を見る目が培われていく。

関係者と住民が集まって地域における学びをつくる

楽校の事業推進者としては、活動拠点となる児童館、公民館、学校他、教育委員会、栗東市子どもセンター(体験活動ボランティア活動支援センター)NPO子どもネットワークセンター等が核となり、活動内容ごとに異なる人や組織が関わる。市ボランティア・市民活動センターは、社会資源を発掘し、それらの人・組織・団体をつなぐ役割を担っている。

その他に、子どもたちを見守りながら共に行動するサポーターを市民から募集。市のボランティア連絡会に所属するVグループはサポーターの強力な一員として参画しているし、参加者だった子どもが中学生になってサポーターとなる場合もある。

中高生から高齢者まで、無理をせず自分のできる範囲で子どもたちをサポートする。当日参加する人や事前準備に携わる人、子どもたちのミーティングでサポートする人など多様な形で関わることができ、必要に応じてサポーターのオリエンテーションや研修が活動拠点ごとに行われている。

拠点は児童館や公民館

楽校は校区ごとの拠点を中心に活動を展開しており、市内8校区のうち、現在3校区が児童館、2校区が学校、1校区が公民館を拠点にして活動している。児童館は公民館に併設されており、公民館に配属されている地域コーディネーターは、教育委員会への働きかけも含めて積極的に事業に参画している。

拠点ごとに子どもたちのグループ「ひみつっこ探偵団・ちいき知りたい(隊)」が組織されるが、固定的なものではなく、活動テーマごとに参加者が募集され、グループリーダーが選ばれる。班分けの際に意識して異年齢集団をつくり、中高生のサポーターも関わる中で、大きい子が小さい子の面倒を自然にみるようになってきた。

児童館を拠点とする活動の例をとると、企画のスタートは、スタッフが子どもに声をかけることから始まる。児童館の常連である子どもたちを集めて、「どんなことをしたい?」と子どもたちの遊び心を引き出していく。子どもたちはみんなで企画を生み出し、ミーティングを重ねる中で企画の肉付けをしていく。参加者の募集方法を決め、自ら仲間を集める。スタッフやサポーターが、話の流れを見守りながら、最小限の必要事項を示唆していく。

子どもをひきつける「ドエラえもん」のしくみづくり

公民館や児童館には、地域のどえらい人を探そうという趣旨で「ドエラえもんポスト」が置かれている。子どもたちが「達人を見つけた」「こんなことをしたい」といった内容を報告用紙に書いてポストに入れると、月1回開催される「ひみつ会議」の場で、投書した子どもたちにコインが渡されるしくみ。地域のNPOがつくる金属製のコインは3種類あり、たくさん集めると大きいサイズのコインに交換できる。コインの使い方は実はこれから子どもたちが考える予定だが、コインという道具自体が子どもたちには大きな楽しみになっている。

これまで探し出された達人には、ひょうたん、味噌作り、里山、合鴨などバラエティにとんだ地域の達人たちがおり、「探偵団」の“調査対象”を引き受けてもらっている。



手作りのドエラえもんコインを集めるのも子どもたちの楽しみ

治会単位とか、近所のおばちゃん子どもたちを見てくれるようなやり方。そうやって地域で子どもたちを見守る環境ができれば、子育ての不安が軽くなってお母さんも元気になると思いますよ。

結局楽校の目的は、自分のまちをもっと知ってほしい、好きになってほしいということなんです。自分のまちが好きになれば、自分のことも好きになってくれるに違いないと思いますから。

地域安心協働楽校では、大人は口も手も出さないというのが原則で、大人は後ろで見守る約束になっています。でも、大人も共に参加して楽しんでいます。大人は子どもの目線まで下がる、つまり子ども心に返って、と言うんですが、それは結局子どもに教えてもらうことなんです。もう一度子どもの時代に返ってお互いに教えあうのだから、大人にとっても楽しい活動なんです。今活動ができてきているので、「里山サミット」など、全市でみんなが参加できる大きな事業をやってみたいと思っています。その反面、もっと小地域でできればいいとも思います。自



子どもが楽しい事業は大人も楽しい 鈴木喜美子さん 栗東市ボランティア・市民活動センター

公募と自己選択が 「いまばり夢学校」のルール

特定非営利活動法人 今治NPOサポートセンター 愛媛県
http://www.biwa.ne.jp/~ritto-vc/



「いまばり夢学校」とは

今治NPOサポートセンター(以下「サポートセンター」)は市民活動を支援することを目的としているが、活動の担い手と地域の子供たちが触れ合う機会が少ないことが課題だった。このため、将来地域に関心を持つ子どもたちを育てたいという「大人の願い」をこめたプログラムとして始めたのが『いまばり夢学校』である。

この事業は、子どもたちが自分のまちを主体的に学ぶなかで、事業に関わる地域の大人も共に育ちあう場となることをめざす体験型プログラムである。(平成16年度のカリキュラムは表参照)

“自ら選ぶ”という動機付けを大切に

事業に携わるスタッフは、事業全体を運営する本部スタッフと、外部から公募した夢学校の先生となるスタッフがいる。スタッフも夢学校の生徒も全て公募しているが、それは“自ら選ぶ”という動機付けを大切にするためである。

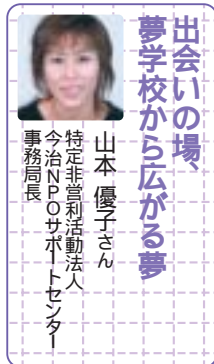
2年目の今年度から、子どもたちと年齢の近い学生を本部スタッフとして公募、主に子どもたちに関わることを役割とした。サポートセンターのメンバーは、先生となる市民活動団体の支援を担当することとし、役割分担を図った。

先生は、地元で身近な課題に取り組む方々である。彼らは2回の研修を通して、子どもたちに提案する企画に磨きをかける。研修は、指導して教えるのではなく、お互いに言いたいことを出し合っていくようにした。

夢学校の生徒は、教育委員会の後援を得て市内の小中学校に公募し、1年目は51人、今年度は35人が参加した。



プレゼンを聞いた子どもたちは受けたいカリキュラムを話し合いで決める



夢学校から広がる 出会うの場 山本優子さん 特定非営利活動法人 今治NPOサポートセンター 事務局長

夢学校は出会いの場です。一回の授業で伝えられることは限られていますが、先生役が地域のNPOであり、継続した関わりが可能です。子どもたちにとって、使命を持ったNPOという集団が地域の中で真剣に何かを解決しようとしている、そういう大人たちがいると知ることは大きな意味があります。夢学校を通して、参加するNPOは他団体の活動を知ることができます。それによって新しい視点が得られますし、こうしてネットワークや協働がすすんでいけばよいと思います。一票も入らなかったプログラムについて、学生スタッフが「やらなくていいの?」と聞いていくと、そこでまた議論が始まります。このように大人が時間をかけて聞いてくれるのも子どもにとっては初めての体験。学生スタッフたちが子ども

多数決をしない決め方

夢学校は子どもたち自身がカリキュラムを選ぶ。市民活動団体が子どもたちにプレゼンテーション(発表)を行い、今年度は9つの候補から6つを選択。選考は個人による評価の後、グループごとに意見をまとめ、投票と意見交換をしながら全体で合意形成を図る。

多数決に慣れた子どもたちにとって、最後まで話し合いで決めることは初めての体験である。他人の意見を受け入れたら、自分の意見が通らないことに納得をするという体験のなかで、仲間と目標を共有し、学びの主体者となっていく。

子どもだけでなく、関わる人みんなが主体

いかに子どもたちの動機や意欲を大切にしたいと言っても、大人が用意したカリキュラムという側面は残る。そこで「子どもが主体」という考えは大切にして、かつ「関わる人みんなが主体」と考えた。

本部スタッフも、先生も、それぞれが事業の主体者として成長することを目的におく。サポートセンターのメンバーは、先生である市民活動団体や学生スタッフと丁寧なミーティングと議論を重ね、関わる者皆の成長に気を配る。市民活動団体は、カリキュラムを通して子どもと関わる中で、自らの企画力やプレゼンテーションの力を養っていく。学生スタッフは、子どもの学びの場を設定するコーディネーターとしての能力を育てていく。

平成16年度 カリキュラム		
月	カリキュラム名	スタッフ名
8月	ゆかたをきてみよう	愛媛県和装友協会
8月	ニイハオ、元気?	えひめ気功研究会
9月	戦国時代に夢を見よう!	今治市スポーツチャンバラ協会
10月	とどけ! 最高の1ショット!! (車いすツインバスケツ)	愛媛エンジェルス
11月	大島ゆめゆめキャンプ	A3文庫
12月	じいちゃん・ばあちゃんに笑顔のプレゼント(老人福祉施設への訪問)	来島松五郎一座

にちゃんと向き合っている姿を見ると、短い研修の中で、しっかり夢学校の理念を身につけてくれたことに感じました。夢学校を通してみんなの意見を汲み取っていく力をつけた子どもたちが、地域で花開けば嬉しいですね。町づくりは10~20年先を見据えた活動なので、長い目で変わってくればと思います。これからは地域のNPOもきちんとプレゼンテーションができるなければ、活動の継続は難しいと思います。その意味で、子どもが主体的に参加して評価する夢学校のシステムは大人育ちにも有効です。夢学校システムを広く普及していきたいと考えています。

子どもの主体的な学びを支援するために大切なこと

山本克彦さん

岩手県立大学社会福祉学部福祉臨床学科講師



「気づく、わかる、かわる、かえる」プロセスが大事

現代は子どもたちが様々な間接体験をできる環境にあるが、その反面、子どもが直接体験をする機会を奪っている傾向がある。直接体験の意味の一つは、体験することにより「気づき」があるということである。間接体験では「わかったつもり」で終わることが多いが、自ら体験することで、「わかる」前の「気づき」のプロセスがあり、より深い理解が得られる。

体験して学ぶことで重要な点は、「わかった」後に「かわる、かえる」というプロセスをつなげていくことである。体験を体験だけで終

わらせず、体験から学んだものが子どもたちの内面（価値観やものの見方、感じ方）の変化を促し、子どもたちが主体的に社会に関わっていく気持ちを育てる、という流れができて初めて、体験が活かされることになる。

体験することで身近な地域や社会で起こっている様々な出来事に興味を持ち始め、それにより子どもが自ら考え意見を表明し動いていくきっかけになるよう、そうしたプログラムをおとな側が積極的につくっていく必要があるだろう。

子どもの力を「引き出す」という視点を持つ

子どもの主体的な参画をプログラムに活かしていくためには、“サポートする側の大人”と“子ども”の水平な関係づくりが前提となる。大人側がプログラムをつくって提供すれば、そこには水平な関係はできにくい。大人はある意味正解を持っているので、誘導してしまったり、描いているゴールとずれていると、修正しようとしたり審判を下したりする。しかし、「あなたたちが感じたこと、考えたことは全て正しい」と受け入れることができれば、子どもたちは生き生きと自分の意志を語り始め、大人への信頼も生まれてくる。

子どもは力がないから育てないといけなくと考えるか、それとも持

っている力が発揮される手伝いをしようというスタンスに立つかで、プログラムのつくり方が全然違ってくる。私の経験上、じっくり待った時に、子どもはびっくりするような力を発揮してくれることが多い。だから待ちの姿勢はとても大切だと思う。「子どもたちはできる」という信頼を持つことが前提として必要だろう。

そして、子どもを信じて待って、その結果「子どもたちはやればできる」という実感を大人が持ったとき、“待つこと”ができた自分にも自信が持てるし、その時大人自身の育ちが期待できる。

大人が持つべきスキル(技術)とは

例えば、遊び場づくりを企画するワークショップ(体験学習)をすると、子どもたちの思いは現実離れしていることがあり、公園の地下にもうひとつ公園を造るなどという意見も飛び出す。しかし頭からそれは無理だと言わず、最初はとにかく枠をつくらずに意見を引き出し、必要な場面で現実としての制限や理屈を伝える。その駆け引きが大人のスキルのひとつだと思う。このように「指導型」ではなく「促進援助型」のリーダーをファシリテーター(進行者)と呼ぶ。

ファシリテーターには、流れを見ることが流れによって進め方を変える柔軟性が求められる。子どもが主体的に動くことに慣れていない

活動の初期は、大人から指示を出してもよいし、子どもたちが自ら考え行動できるようになれば、それを尊重する支援型のリーダーシップに変える。そこが子どもたちとの駆け引きの意味である。

成長するのは子どもだけでなく大人ももちろんである。大人は子どもの上段にいると考えるのではなく、子どもに対して謙虚さをもつことができれば、大人も共に成長できる。子どもは未来の大人であり、現時点ですでに一人の人間であるという認識を持つこと、また背景となる子どもの権利などの理解も欠かせない。

ボランティアコーディネーターの役割は

プログラムの推進者である大人は、ファシリテーターとしての役割を担っている。カウンセラーに対するカウンセラー(スーパーバイザー)がいるように、ファシリテーターに対してもファシリテーター役をする人がいたほうがよいと思っている。ファシリテーターが悩みごとや調整ごとを抱えているときや、ファシリテーターの集団をまとめるときなど、Vコーディネーターがスーパーバイザー役として、ファシリテーターのサポートを担ってほしいと思う。

その際も、子どもたちに対する大人のスキルと同じで、常に指示をしようとする限りがある。信じて待ったり、時には明確な指示を出したり、活動の意味をファシリテーターに気づかせたり、と駆け引きしながらサポートしていく必要があるだろう。

子どもと大人がよい関係を築き、子どもが自立して歩み出したら次の関係づくりへ移っていけば、主体的な子どもたちの活動が地域に広がり、厚みを増していくだろうと考える。

栗東コメント

この事例の見習うべき点は、地域の資源を上手につないで使っていることです。探偵団が大根づくりの達人のおばあさんを探しに行くと、そのおばあさんが「私の大根で美味しい漬物を作る達人がいるよ」と次の達人を教えてください。こんなふうにはすれば資源がつながるんですね。

大人は子どもに必要以上に語らないことが大事です。つい最短距離を説明したくなってしまうのですが、地域安心協働楽校では子どもたちに適度なメッセージが届けられているところがいいのではないのでしょうか。

それとこの特徴はプログラム推奨型でないことです。児童館で遊んでいる子どもたちに「何がしたいの」と声をかけて進めていくので、子どもたちが企画者となっています。はじめにプロジェクトありきではないのです。

今治コメント

本人の思いを大切にするという意味で、全て公募の形態をとっていることは大事ですね。そして、サポートする側に、子どもたちに近い大人として学生スタッフがいることがよいと思います。

学生スタッフの研修が指導ではなく、お互いに話し合いが出来るという環境もよいですね。子どもたちは言葉にしなくても、スタッフ間に水平な関係があり、自分たちも水平な関係で受け入れられる場所だと理解するからです。

また、意思決定にいかにか子どもが関わられるかも大事です。多数決は学校でもよくある決定方法ですが、それをあえて否定するところが面白い。当たり前と思いつているものだけではない、という見方が備わってはいませんか。